

【講義 7】表紙の文様について

齋藤 真麻理

一、はじめに

この講義では、古典籍の表紙にほどこされた文様について、名称や命名の由来など基礎的な知識を身につけるとともに、それが古典籍研究にとってどのような意義を有するのか、考えてみたい。

表紙とは、「書物の保護や装飾のため、書物の外側に添えられる」ものである（『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、1999年「表紙」の項）。そのような機能性に加え、表紙は書物の時代やジャンル、作品内容とも関連する場合が少なくない。

一例を挙げるならば、嘉永2年（1849）刊『平家物語 図会』の表紙には、「笹竜胆に浮線蝶散らし」が用いられている

(<https://www.doi.org/10.20730/200007493>)。

これは源平の家紋に基づく装飾であった。即ち、源氏の紋は「笹竜胆」、平氏の紋は「揚羽蝶」とされる。つまり、『平家物語図会』の表紙は、源平合戦を連想させる文様で飾られているのであり、表紙が作品内容を物語る趣向となっている。

このように、表紙の文様や色、素材まで含めて観察し、理解することで、その書物の内容や文化史的意義をより深く理解することができる。

二、表紙のさまざま

表紙には、大別して「裂表紙」と「紙表紙」がある。

「裂表紙」には麻、錦、緞子布などが用いられており、実用より装飾性が重視されているといえよう。17世紀に制作された豪華絵巻などは金襴緞子表紙が多いが、版本については、献上目的等の上製本以外、裂表紙を使用した例はきわめて少ない。

一方、最も多く見られるのが紙表紙である。以下にその代表的な例をあげよう。

- ・素紙表紙。料紙と同素材の表紙で、共紙表紙ともいう。

- ・香表紙。^{こう} 丁字^{ちょうじ} で染色した表紙で、薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前から多用されている。
- ・渋引^{しぶび} 表紙。柿渋を引いた栗色の表紙で、栗皮^{くりかわ} 表紙とも呼ばれる。何度も渋を重ね、光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。
- ・紺紙金泥^{こんしきんでい} 表紙。藍^{あい} で紺に染めた紙に、金銀の泥^{でい} で下絵を描いた表紙。「紺紙金泥」とは紺色の紙に金泥で書いたものをさす用語で、経文や仏画に作例が多い。典型的な例として、平安時代の装飾経を挙げることができる。これは紺や紫の染紙に金銀泥を用いて経文を書写したもので、見返しに経典の内容を示す経絵を描く例も多い。文学においては、物語や歌書に紺色金泥表紙が散見する。金銀の切箔^{きりはく} や野毛^{のげ}、砂子^{すなご} を紺紙にまき、草花や遠山、霞など、その書物とは無関係な風物を描く例が比較的多いが、作品内容を踏まえた絵画表現も見られる。
- ・丹^{たん} 表紙。鮮やかな赤橙色の表紙であるが、水銀を用いているために酸化が進み、鉄色や銀色に変色したものもある。表紙は経年により変色する場合が殆どであるから、もとの色を留めている部分を確認する必要がある。
- ・刷付け表紙。表紙全体に錦絵を印刷した表紙。合巻などに見られる。

三、文様を表す技法

表紙に文様を表現する技法としては、上述のとおり、手描きや印刷によったものがあるが、そのほかにもよく用いられた代表的な技法が二種ある。

第一は、艶^{つや}出し文様である。凹凸の型を表紙の裏面に当て、表面から磨くなどして光沢を出すという技法であり、江戸時代初・中期に多く用いられたとされる。

艶出し文様は、表紙のオモテ上は凹凸が目立たない。従って、経年劣化した表紙の場合、オモテを一見するだけでは文様がないように見えてしまう。しかし、光線の加減で文様の有無や意匠を判別できる場合があるので、無地表紙と即断せず、注意して観察したい。見返しが剥がれているなど、表紙ウラが露出している部分があれば文様が確認しやすい。是非、表紙ウラにも注目して頂きたい。

第二は、空^{から}押し文様である。型を用い、表紙の表面に押しつけて凹凸を浮き出さ

せる技法である。慶長年間（1596～1615）以後に多く見られ、朝鮮本の影響の可能性を指摘する説もある。

明治本にも空押し文様は多く見られるが、明治本の場合はしばしば光沢を伴っている。つまり、艶出しの型押し表紙になっているのであるが、これは西洋の革表紙を意識した意匠であったのかも知れない。

「古典籍」と「近代文献」。両者は一見、距離があるように見える。しかし、実は繋がっている。表紙文様は、それを改めて考えさせてくれる興味深い素材である。

四、表紙の呼称

「三、文様を表す技法」で示した文様は、単一の文様から成る場合と、複数の文様の組み合わせから成る場合があり、文様の配置の仕方にも一定の型がある。それらの呼称について簡単に示しておく。

第一、「地」「繋ぎ^{つな}」。この呼称は、単一の文様が連続してほどこされている場合に用いられる。たとえば、四角い渦巻き状の文様である「雷文^{らいもん}」は、よく用いられる文様のひとつであるが、これが表紙の面全体に連続性をもって配されている場合、「雷文地」「雷文繋ぎ」などと呼ばれる。

第二、「◇◇地に◆◆文様」「◇◇繋ぎ地に◆◆文様」。これは、地文様◇◇に別の文様◆◆を取り合わせている場合に用いられる。たとえば、「雷文」を連ねた地文様の上に「唐草^{からくさ}文様」が配されていれば、「雷文繋ぎ地に唐草文様」と称する。このように文様を組み合わせた表紙は多く見られる。

第三、文様が一定の間隔をおいて配されている場合。これは「地」「繋ぎ」ではなく、「散らし」という呼称を用いる。たとえば、「二葉葵^{ふたばあおい}」の文様が散らしてあれば、「二葉葵散らし」などと呼ぶ。

このほかによく出てくる文様には、「何々の丸」と称する文様がある。これは円の中、または、円形に動植物などが描かれている文様であり、たとえば、「龍の丸」、「鶴の丸」などと呼ぶ。また、刷毛^{はけ}ではいたような線状の文様は「刷毛目文様」と総称され、線が横であれば「横刷毛目」、縦であれば「縦刷毛目」といったバリエーションで呼ばれる。

五、表紙の世界

古典籍の表紙には、四季の景物や動植物、器物、文字、幾何学文様など、さまざまな意匠が凝らされている。吉祥性や季節感を兼ね備え、古くから調度品等々に用いられた文様がある一方、それと気づかないかたちで、現代の私たちの日常生活の中に溶け込んでいる文様もある。

ひとつひとつの文様の出自を尋ねてみると、その豊かな文化的背景が見えてくる。それを知ることによって、古典籍に新たな奥深さを感じることができるのではないだろうか。

また、表紙にはしばしば古典籍の反故が補強材として用いられている。時にそこからは、古活字版や近世の書肆における書物制作の記録など、当時の書物文化をめぐる貴重資料が発見されることがある。こうしたいわば表紙のウラの顔は、端正に整えられたデジタル画像ではまず視認できないが、今後、非破壊で表紙裏反故のデータを集中的に集積できれば、多様な知見を得られる可能性があるだろう。

このように、表紙のオモテとウラの顔は、日本の豊かな書物文化を今に伝えている。それらを見出すためにはデジタル画像のみに頼らず、原本を「見る」ことが何よりも重要である。

参考文献

本資料の用語は『日本古典籍書誌学大辞典』に拠った。色も重要な書誌事項であるため、参考文献に加えた。WEB上の色見本は環境により異なる色調に見え、古典籍の表紙の色と、光沢紙に再現された色とでは明度や色調に差異が感じられる。従って使いやすい色見本を決め、均質な書誌データを採ることを勧めたい。

【文様】

- ・『日本古典籍書誌学辞典』岩波書店、1999年
- ・国文研文献資料部『調査研究報告』25号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川

剛生編、2004 年)

- ・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968 年
- ・岡登貞治『日本文様図鑑』東京堂出版、1969 年
- ・今永清二郎責任編集『日本の文様』小学館、1986～89 年
- ・並木誠士『すぐわかる日本の伝統文様—名品で楽しむ文様の文化』東京美術、2006 年
- ・落合博志「古典籍の原本をみる」『古典籍研究ガイドンス 王朝文学をよむために』笠間書院、2012 年初版
- ・落合博志「江戸初期の出版事情一面—本能寺前版古活字版考・序説」『慶應義塾図書館の蔵書』慶應義塾大学出版会、2009 年
- ・池修『佛教の文様 打敷の織と刺繍』光村推古書院、2017 年
- ・海野弘『日本の装飾と文様』パイインターナショナル、2018 年
- ・八條忠基『有職文様図鑑』平凡社、2020 年
- ・石崎忠司ほか『和の文様辞典 きもの模様の歴史』講談社学術文庫、2021 年
- ・国文研編『本 かたちと文化 古典籍・近代文献の見方・楽しみ方』（勉誠社、2024 年）

【表紙ウラ】

- ・渡辺守邦『古活字版伝説』日本書誌学大系 54、青裳堂書店、1987 年
- ・渡辺守邦『表紙裏の書誌学』笠間書院、2013 年
- ・今西祐一郎「表紙裏の散歩」『雅俗』17、2018 年
- ・新美哲彦「近世前期の写本制作—伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から」『国語国文』72-7、2003 年 7 月（『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院、2008 年）
- ・齋藤真麻理「奈良絵本と『徒然草』—ジャンルを往還するメディア—」『東アジアにおける知の往還』勉誠出版、2021 年

【色名】

- ・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006 年
- ・『日本の伝統色』DIC グラフィックス株式会社
- ・江南和幸ほか「江戸末～明治期の浮世絵、版本の彩色に用いられた石黄について」（「文化財科学会」大会、2004 年／
http://www.jssscp.org/files/abstract/21_poster.pdf）

2024年度
第22回 日本古典籍講習会

講義 7 表紙の文様について

国文学研究資料館
齋藤真麻理
2024年7月3日（水）

- I 表紙とは
- II 表紙を読む
- III 表紙の種類
- IV 表紙文様の基礎知識
 - 艶出しと空（から）押し —
- V 文様のさまざま
- VI 文様レッスン

参考：「表紙文様集成」

<https://www.nijl.ac.jp/pages/images/hyousimonyou.pdf>

※資料中の画像はとくに断らない限り国文研本

I 表紙とは

◆ 定義

書物の本文が記された部分を保護するため、書物の外側に添えられたもの。漢籍では裱（ひょう）・書皮と称される。

（『日本古典籍書誌学事典』「表紙」）

・ 枚数

卷子装の一枚物
かんす

冊子装の二枚物

・ 素材

布表紙（裂表紙）
きれ

紙表紙



「源氏かるた」絵合より、卷子と冊子
<https://doi.org/10.20730/200024765>

◎ 装飾性・さまざまな意匠

◎ 時代・ジャンル・作品内容などにも関わる世界

◎ 書物の「顔」

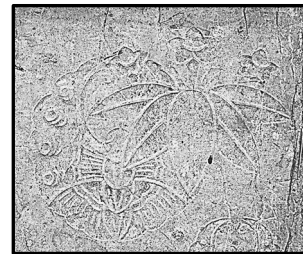
※QRコードから古典籍の画像をごらん頂けます。

国文研「国書データベース」を是非ご参照ください。



Ⅱ表紙を読む―『平家物語図会』―

◆ 嘉永二年（一八四九）刊『平家物語図会』



<https://www.doi.org/10.20730/200007493>

◆ いのししに笹りんどうのゑふを立て（『柳多留』）

◆ 『見聞諸家紋』



<https://doi.org/10.20730/200020359>

ささりんどう ふせんちよう

◎ 表紙文様―笹竜胆に浮線蝶散らし

◎ 源氏の紋は笹竜胆、平氏の紋は蝶という理解が定着し、

源平合戦を連想させる表紙文様へ。

◎ 現代にも受け継がれる文様の世界



鎌倉市の
市章

Ⅱ表紙を読む―『月詣和歌集』―

◆文化五年（一八〇八）刊『月詣和歌集』



わけいかづち

平安時代後期の私撰集。賀茂別雷社の神職である賀茂重保が編纂した。書名は当社に月参する人々の和歌を集めた歌集であるところから命名。

◎表紙文様―二葉葵―賀茂神社の神紋

◆元禄三年（一六九〇）刊『人倫訓蒙図彙』「表紙屋」（左端）

書本、板本、
白紙、品／＼を
本屋より受け取り、
かけるなり、



<https://doi.org/10.20730/200016830>
(120コマ)

Ⅲ表紙の種類

◆布表紙（裂表紙）

麻、錦、緞子（どんす）など布を用いる。実用より装飾性。緞子は、経系（たていと）・緯系（よこいと）に異なる色の糸を用いて、文様を織り出した厚地の表紙。光沢があり、重厚な印象。金糸や金箔を用いたものは金襴緞子（きんらんどんす）という。豪華な写本や絵巻絵本などによく使われる。版本では献上目的等の上製本以外、布表紙の例は僅少。

◆紙表紙

素紙（そし） 表紙 料紙と同素材。共紙（ともがみ）表紙とも。
香（こう）表紙 丁字（ちようじ）で染色。薄赤に黄色味を帯びる。江戸時代以前にも多用された。

- ①『大黒舞』
江戸時代前期写 絵巻2軸 貴重書
<https://www.doi.org/10.20730/200006198>
縹色地に唐草文様金襴表紙
(はなだいろ)



- ②『阿仏のふみ』
江戸時代前期頃写
<https://doi.org/10.20730/200009653>
共紙表紙



- ④『古今口伝秘抄』
室町時代初期写 1冊

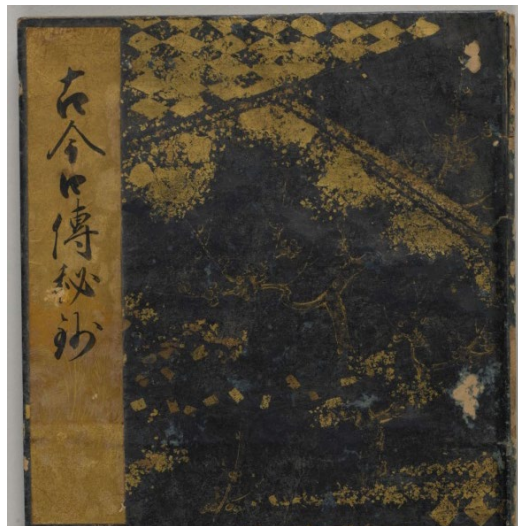
<https://www.doi.org/10.20730/200000091>

紺紙金泥表紙

- ⑤『ささやき竹』
江戸時代前期写 3冊

<https://www.doi.org/10.20730/200003084>

紺紙金泥表紙



- ③『太平記』
寛永元年刊 古活字版 41冊 貴重書

<https://www.doi.org/10.20730/200003071>

渋引き表紙 (栗皮表紙)



渋引き表紙 Ⅱ 柿渋を引いた栗色。栗皮表紙。何度も渋を重ね、
光沢を帯びたものもある。比較的虫害に強いとされ、江戸
時代初期の古活字版、抄物、仏書、漢籍などに多い。



じらいやごうけつものがたり
⑥『児雷也豪傑譚』合巻 48冊
<https://www.doi.org/10.20730/200004250>
(No.972コマ・No.985コマ)
刷付け表紙



刷付け表紙Ⅱ合巻などの表紙全体に錦絵を印刷。

⑥『伊曾保物語』 万治2年刊 1冊
<https://www.doi.org/10.20730/200021086>
丹表紙（雷文襷雨竜文様 らいもんだすき あまりょう）



表紙ウラ・見返し剥がれ



丹（たん）表紙Ⅱ鮮やかな赤橙色。水銀を用いているため、酸化が進み、鉄色や銀色に変色するものもある。

Ⅳ表紙文様の基礎知識

―艶出しと空（から）押し―

艶出し文様

凹凸の型を表紙の裏面に当て、表面から磨くなどして、文様をうつし、光沢を出したものの。

江戸時代初期・中期に多いとされる。

経年劣化により、一見、無地に見えることもあるが、光線の加減で判別できる場合もあるので、角度を変えて観察。見返しが剥がれていたら、露出した裏面に注目。

空押し文様

型を表紙の表面に押しつけ、凹凸を浮き出させた文様。慶長年間（一五九六～一六一五）以後に多く用いられる。明治本にも多い。

単一の文様／地模様＋別の文様の組み合わせ／
文様を散らす、などのバリエーションがある

※技法の呼称は一定しないが、ここでは『日本古典籍書誌学辞典』による。

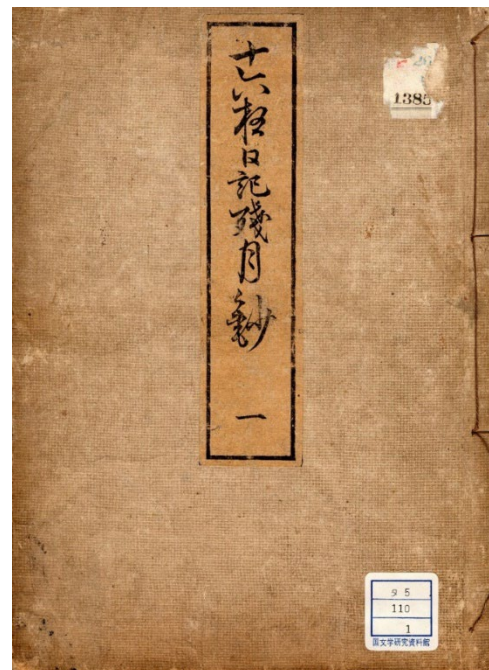
※国文研文献資料部『調査研究報告』1・2・4・5・6・12・13・

14号、および、同25号の別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、2004）参照。

V 文様のさまざま

地文様・幾何学文様

① 布目



文政7年刊『十六夜日記残月抄』タ5-110-1-3
<https://doi.org/10.20730/200001913>



(部分拡大)

② 卍繋ぎ (まんじつなぎ)

卍の字をくずして連ねたような形。紗綾形 (さやがた) とも呼ばれる。卍は仏菩薩の胸や手足等に現れた吉祥相。

例…卍繋ぎ地に牡丹 (ぼたん) 唐草



慶安5年刊『奥義抄』(表紙ウラ) サ2-14
 おうぎしょう

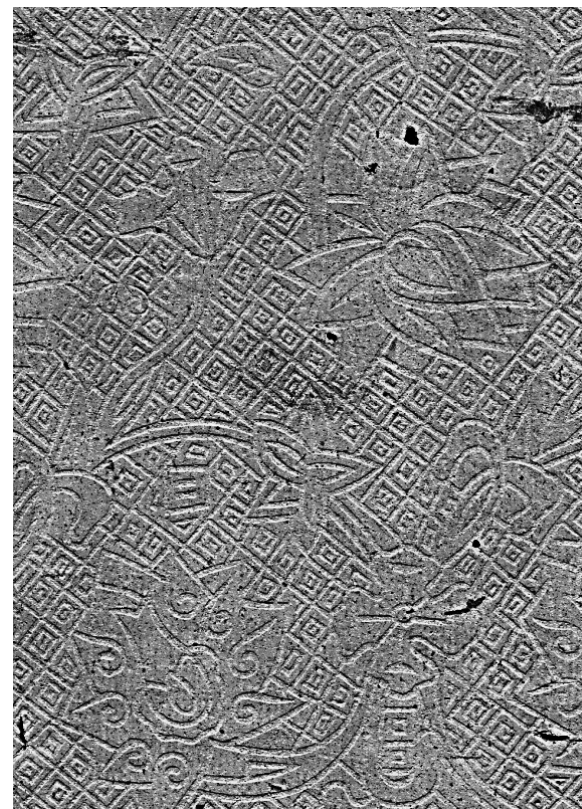
<https://doi.org/10.20730/200000991>

<https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200000991/viewer/2>

③ 雷文（らいもん）

稲妻形に屈折した線から成る。方形のうずまき状。

例…雷文繋ぎ地に蓮華唐草



明治期刊『青丘詩鈔』（表紙ウラ）ラ4-1
せいきゅうししょう

例…雷文襷_{たすき}地に雨竜

寛永無刊記『徒然草』（表紙ウラ）
タ5-32
<https://doi.org/10.20730/200002162>

東洋文庫『かげきよ』三-A-d-10
<http://124.33.215.236/gazou/201608/showimg201608.php?lstdir=3-A-d-10&booktitle=%E6%99%AF%E6%B8%85&iPage=1&pgtitle=>

④麻の葉

例…麻の葉地に小菊と若松の丸散らし

(行成表紙 こうぜいびょうし)

堀田◆の丸+散らし



・行成表紙 藤原行成好みの紙(行成紙)を用いた表紙。

江戸時代中期以降に多い。

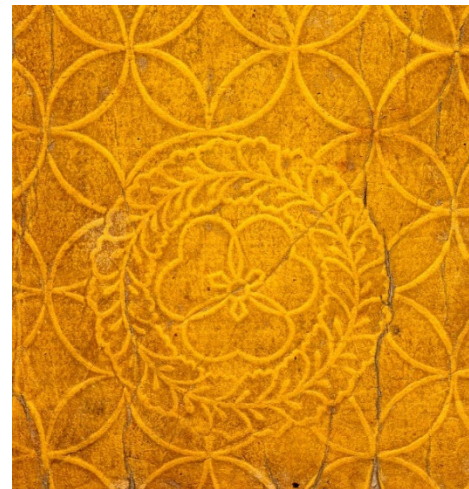
薄い色の紙に、麻の葉繋ぎや亀甲繋ぎなどの地模様と、菊や松葉などの丸文様をあしらったものを指す。

行成(972〜1027)は平安時代の三蹟^{さんせき}の一人とされる能書家。

江戸後期刊『頭書鴨長明方丈記』(方丈記之抄)
89-344(高乗家) <https://doi.org/10.20730/200015862>

⑤ 七宝繋ぎ（しっぽうつなぎ）

例：七宝繋ぎ地に藤輪に片喰^{かたばみ}文



文久3年刊『江戸大節用海内蔵』
えどだいせつようかいだいぐら

マ3-39

<https://doi.org/10.20730/200004490>

⑥ 菱（ひし）

例：布目^{ぬのめ}地に花菱



嘉永元年序・刊『偏類六書通』
へんるいりくしやうつう

マ3-52

<https://doi.org/10.20730/200004493>

例：松皮菱



江戸後期刊『枕詞燭明抄』
まくらことばしよくみやうしょう

ナ2-289(表紙ウラ)

<https://doi.org/10.20730/200006564>



例…毘沙門亀甲（びしゃもんきっこう）

『天林山笠覆寺観音縁起』

てんりんさんりゅうふくじかんのんえんぎ

MX-355-44

<https://doi.org/10.20730/200018616>



⑦ 亀甲（きっこう）
例…花文二重亀甲繋ぎに竜

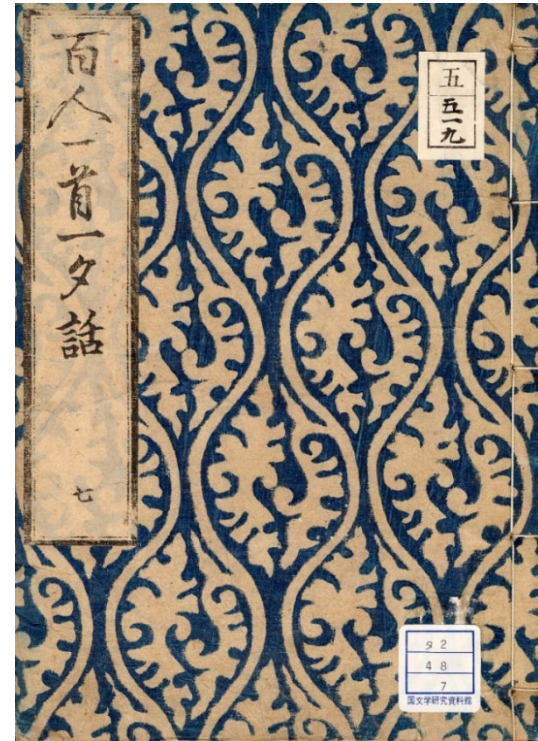
宝永7年刊『二人びくに』 ナ4-409



慶應義塾大学蔵『しゅてんとうし』上巻
<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-70-3-1>



慶應義塾大学『ぶんしやう』巻3
<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/110x-445-3-3>

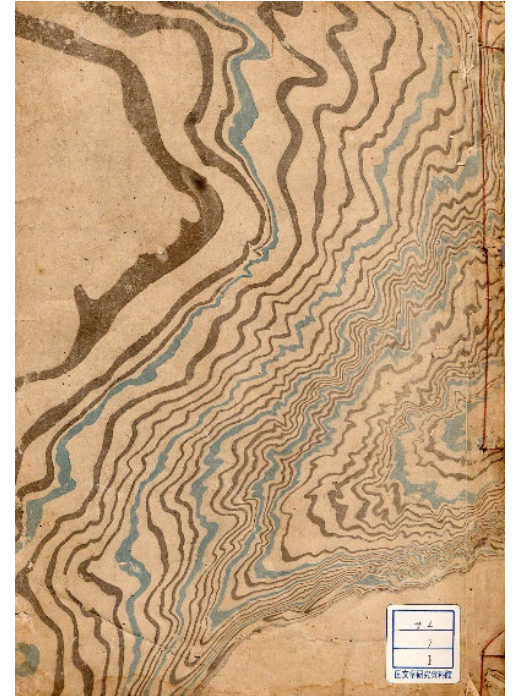


天保4年刊『百人一首一夕話』タ2-48
<https://www.doi.org/10.20730/200000999>



⑧立涌（たてわく・たちわく）
 雲がわき起こるさまをかたどった吉祥文。
 例：雲立涌

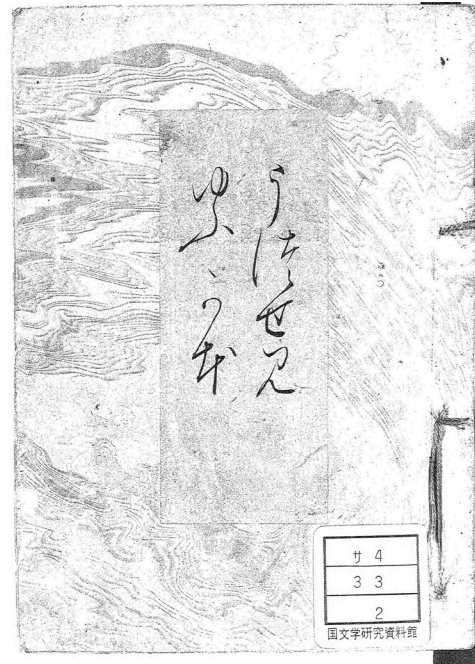
⑨ 墨流し



天明4年刊『竹取物語抄』サ4-7

<https://www.doi.org/10.20730/200001896>

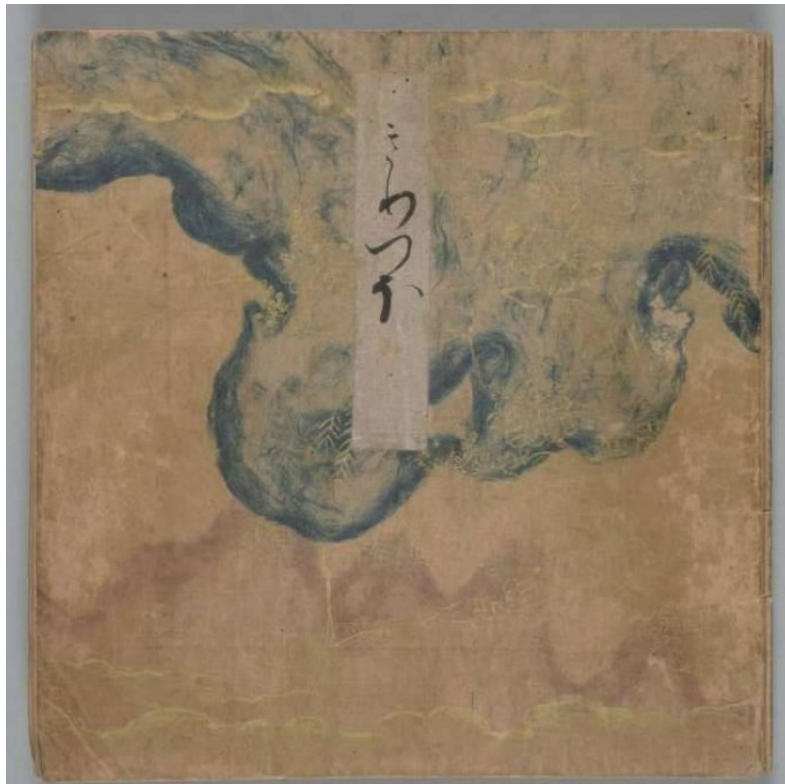
⑩ 打曇り（うちぐもり）



『源氏物語』サ4-33

<https://www.doi.org/10.20730/200005712>

※金泥で源氏絵を
描き添えている



『源氏物語』99-165-1~16

<https://doi.org/10.20730/200016474>



江戸後期『百人一首』
ナ2-204

例：横刷毛目（渋引）



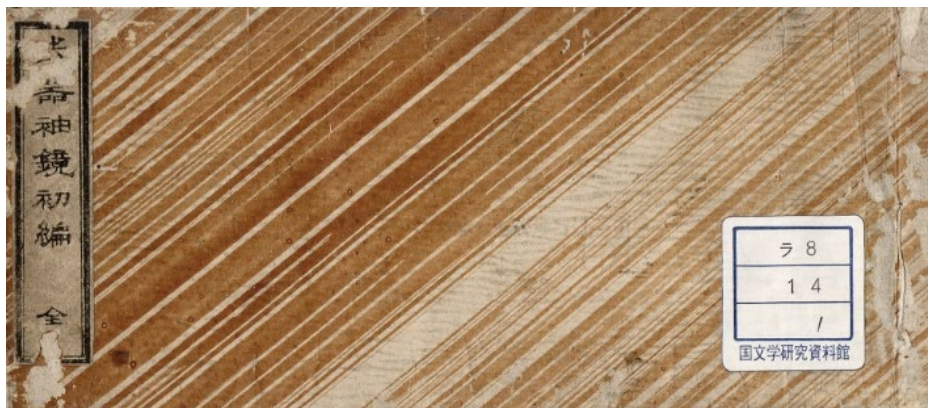
近代写『うつほ物語俊蔭巻』
12-446(初雁文庫)
<https://doi.org/10.20730/200003341>

例：格子刷毛目



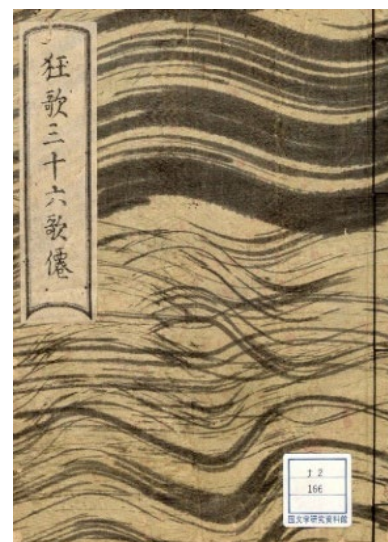
江戸後期写『中殿御会和歌』タ2-11
ちゅうでんぎょかいわか
<https://doi.org/10.20730/200001948>

①刷毛目（はけめ）
例：横刷毛目



天保14年刊『武器袖鏡』ラ8-14
<https://doi.org/10.20730/200000845>

例：斜刷毛目（檀紙）

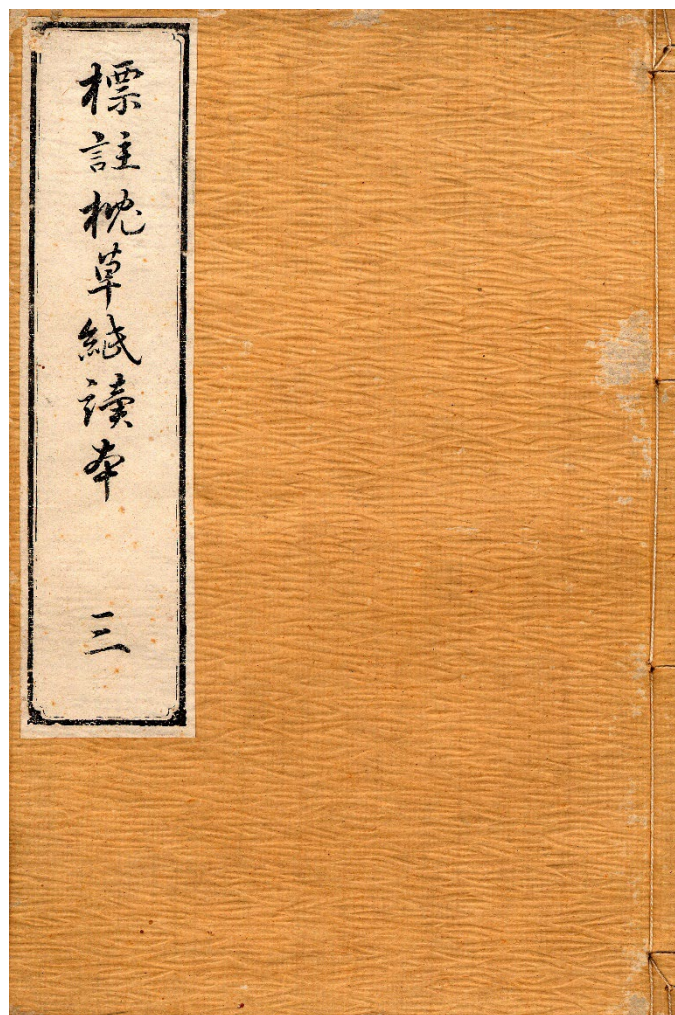


文政5年刊『狂歌三十六歌遷』ナ2-166
<https://doi.org/10.20730/200002692>

例：波刷毛目

⑫ 檀紙（だんし）

正倉院文書にすでに見え、檀（まゆみ）の皮の繊維から作った厚手の上質の白い紙。公式文書や消息、懷紙などに使用。「まゆみの紙」（『宇津保物語』）とも。のち、楮を原料とする。近世後期から、縮緬状のしわを施すようになる。

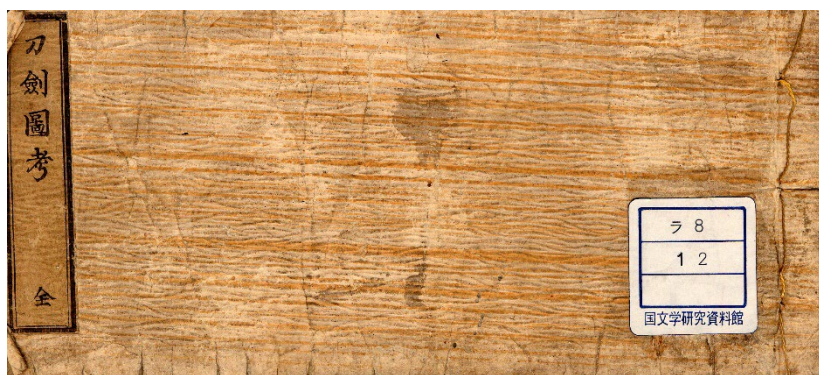


明治28年刊『標註枕草子讀本』



嘉永5年序・刊『打聴鶯蛙集』ナ 2-118

<https://doi.org/10.20730/200003907>



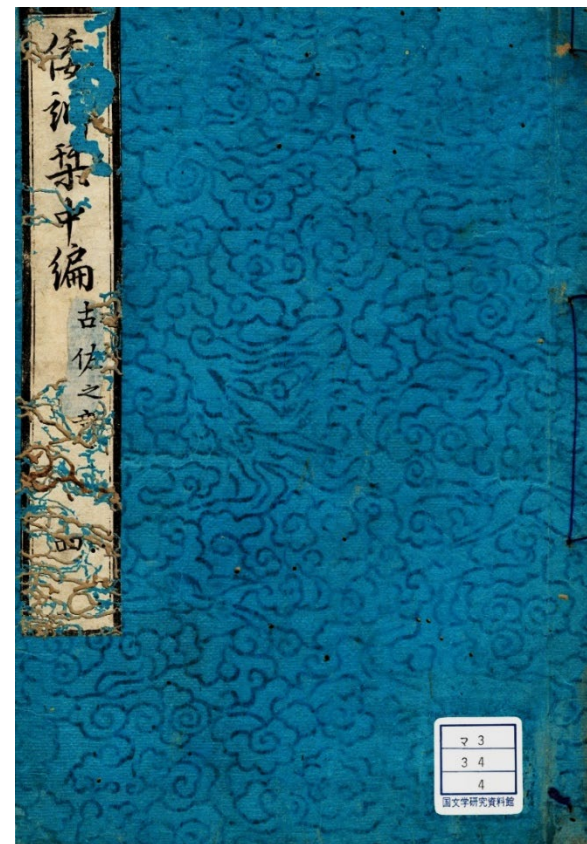
天保14年刊『刀劍図考』ラ 8-12

<https://doi.org/10.20730/200000843>

自然・動植物文様

①雲文

例：雲中に鶴



明治15年刊『倭訓栞』マ3-34
わくんのしおり

例：朽木（くちき）雲



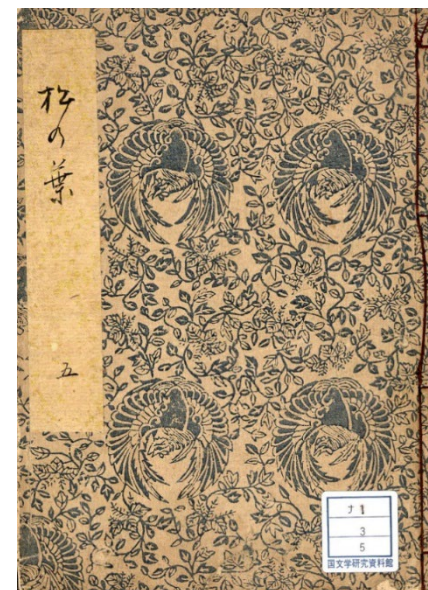
幕末明治期刊『近世奇跡考』
ナ5-141



天保14年刊『古今和歌六帖標注』
サ2-1

②唐草

例…桐唐草と鳳凰の丸 ※古来、鳳凰は桐に棲むとされる



元禄16年刊『松の葉』ナ1-3
<https://doi.org/10.20730/200002600>

例…蓮華唐草に梅鉢散し



『徒然草』万治2刊 89-36(高乗)
<https://doi.org/10.20730/200015971>

③信夫(しのぶ)

例…布目地に信夫の丸散らし



明治9年刊『十符の菅薦』ハ5-7
 じっぶのすがこも

例…布目地に信夫と蝶



『茅窓漫録』天保4刊 ナ5-12
<https://doi.org/10.20730/200002247>

④ 葵（あおい）

例…小葵（こあおい）



元禄6年刊『伊勢物語絵抄』 12-416

⑤ 芭蕉

例…芭蕉葉散らし



安政6年序・刊『貞享式海印録』ナ3-23

じょうきょうしきかいじんろく

⑥ 梅

例…氷割れに梅花



『武家百人一首』
ナ2-212

◆明治十七年刊『古文真宝俚諺抄』（個人蔵）

- ・ 卅繋ぎ
- ・ 強い光沢…西洋の革表紙を真似たものか。



- ・ 表紙の裏打ち紙（表紙裏反故）に貴重書の断片や記録が使われたケースが報告されている。
- ・ 非破壊で表紙裏反故のデータを集められれば新知見が得られるのでは。
- ・ 表紙のオモテ・ウラには、日本の書物文化の貴重な情報が含まれる。

◎端正に整えられた画像では得られない知見が「原本」にはある。

◎原本を「見る」ことの重要性

◎時代性と文芸が織り出す表紙の世界

VI 文様レッスン①



唐草文様

表紙

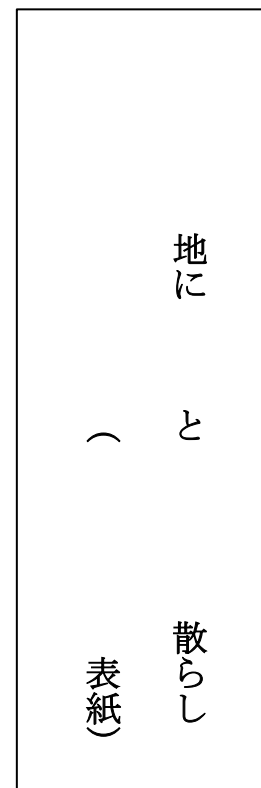


表紙: 唐草文様
表紙: 唐草文様

VI 文様レッスン②



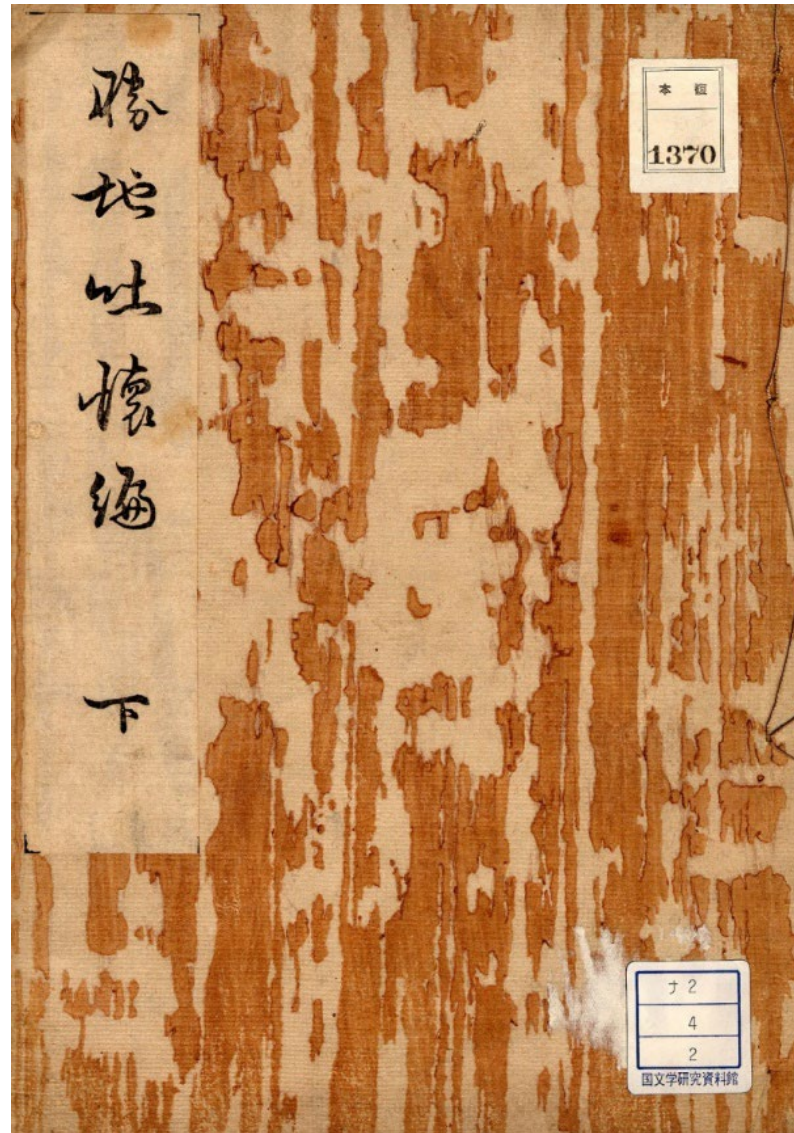
江戸後期刊『周防内侍』ナ4-17



(行成表紙)

啓：毘沙門亀甲地に
小桜と若松の丸散らし

VI 文様レッスン③

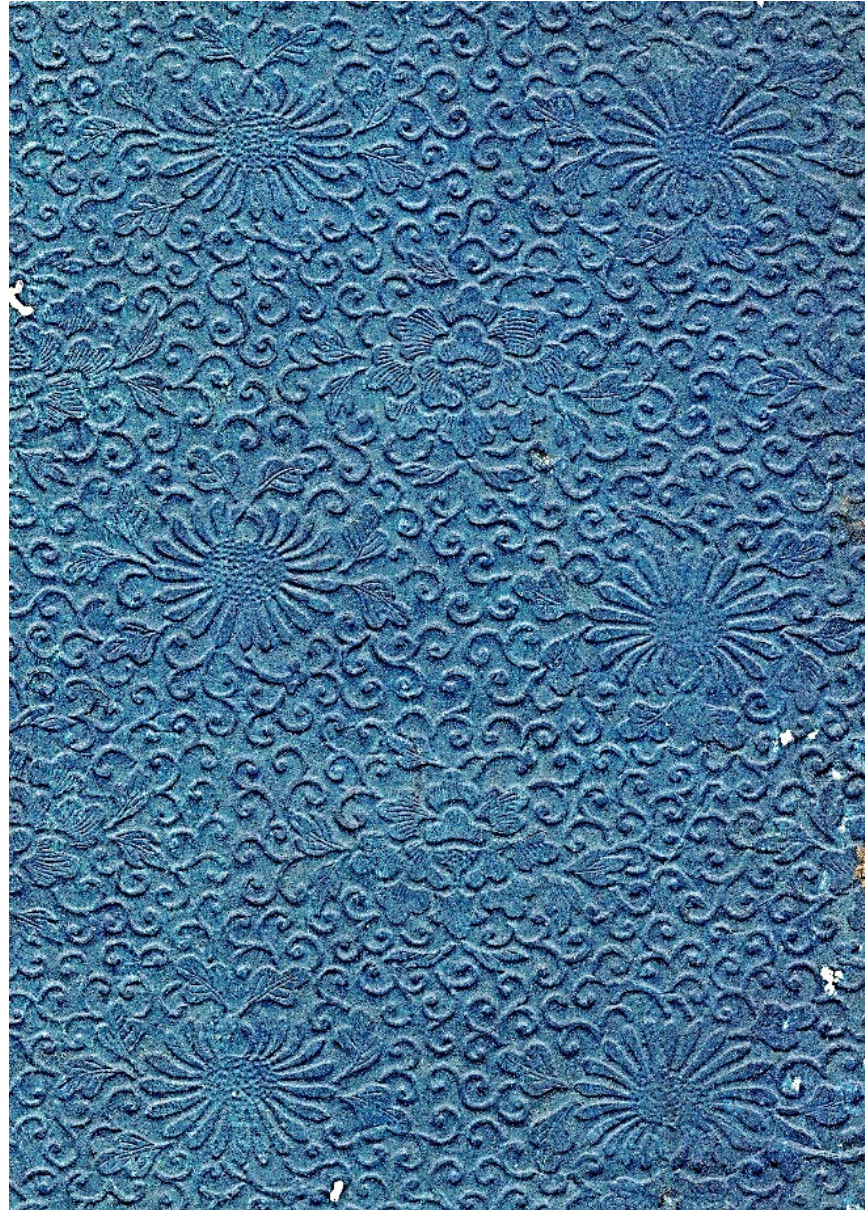


寛政4年刊『勝地吐懷編』ナ2-4

目
(
引)

表: 縦刷毛目 (捺引)

VI 文様レッスン④



『国本論』

唐草

唐草: 牡丹草

VI 文様レッスン⑤



安永7年刊『奥細道菅蓆抄』ナ3-119

啓：信夫散らし

VI 文様レッスン⑥



(部分拡大)

『松屋叢考』ヤ9-122



地に

答：布目地に若松

主な参考文献

◎『日本古典籍書誌学大辞典』岩波書店、1999年

- ・国文研文献資料部『調査研究報告』25号別冊『表紙文様集成』（中野真麻理・小川剛生編、2004年）
- ・沼田頼輔『日本紋章学』人物往来社、1968年
- ・岡登貞治『日本文様図鑑』東京堂出版、1969年
- ・今永清二郎責任編集『日本の文様』小学館、1986～89年
- ・並木誠士『すぐわかる日本の伝統文様—名品で楽しむ文様の文化』東京美術、2006年
- ・落合博志「古典籍の原本をみる」『古典籍研究ガイドンス 王朝文学をよむために』笠間書院、2012年初版
- ・落合博志「江戸初期の出版事情一面—本能寺前版古活字版考・序説」『慶應義塾図書館の蔵書』慶應義塾大学出版会、2009年
- ・池修『佛教の文様』光村推古書院株式会社、2017年
- ・海野弘『日本の装飾と文様』パイインターナショナル、2018年
- ・八條忠基『有職文様図鑑』平凡社、2020年
- ・石崎忠司ほか『和の文様辞典 きもの模様の歴史』講談社学術文庫、2021年

【表紙ウラ】

- ・渡辺守邦『古活字版伝説』日本書誌学大系54、青裳堂書店、1987年
- ・渡辺守邦『表紙裏の書誌学』笠間書院、2013年
- ・今西祐一郎「表紙裏の散歩」『雅俗』17、2018年
- ・新美哲彦「近世前期の写本制作—伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から」『国語国文』72-7、2003年7月
（『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院、2008年）
- ・齋藤真麻理「奈良絵本と『徒然草』—ジャンルを往還するメディア」『東アジアにおける知の往還』勉誠出版、2021年

【色】

- ・長沢盛輝『日本の伝統色 その色名と色調』青幻舎、2006年
- ・『日本の伝統色』大日本インキ化学
- ・江南和幸ほか「江戸末～明治期の浮世絵、版本の彩色に用いられた石黄について」
（「文化財科学会」大会、2004年／http://www.jssscp.org/files/abstract/21_poster.pdf）